

富山大学人文学部令和3年度卒業論文

外国人生徒と、高等学校への進学  
ー富山在住日系ブラジル人生徒を例にー

富山大学人文学部人文学科  
社会文化コース社会学分野  
学籍番号 12019002  
氏名 小川聡志

## 目次

第1章	問題関心	1
第2章	基礎概念と先行研究	2
第1節	日系ブラジル人の概要	2
第2節	日系ブラジル人流入の変遷	3
第3節	日系ブラジル人の移住形態	3
第4節	一時的回帰の物語に関連した教育戦略	3
第5節	日系ブラジル人生徒の学業不振の家庭的背景	3
第3章	アレッセ高岡への調査概要	5
第1節	フィールドワーク	5
第2節	アレッセ高岡の概要	5
第4章	日系ブラジル人生徒への調査概要	8
第1節	インタビュー調査	8
第2節	調査対象者	8
第1項	Aさん	8
第2項	Bさん	8
第3項	Cさん	9
第5項	Dさん	10
第6項	Dさん	10
第7項	Eさん	11
第5章	分析	13
第1節	親の移住動機	13
第2節	地域間移動	14
第3節	国家間移動に伴う教育上の困難	15
第4節	生徒の学習における親の影響	16
第1項	生徒の学習への不十分な関与	16
第2項	生徒の学習への意欲的な態度	17
第5節	進路意識における親子間の不一致	19
第6節	日本での学習・進路選択に関わるきょうだいの存在	21
第1項	生徒の高校進学を支援する役割	21
第2項	進路モデルとしての役割	23
第7節	きょうだい不在の中での教育戦略	24
第1項	DとEの高校進学における困難	25
第2項	高校進学における困難に対する家庭内の取組	27
第3項	モデル不在の中での進路選択	29
第4項	自分のように苦労してほしくないという思い	31

第5項 DとEの学習の困難に対する担任の教員のサポート .....	33
第6項 加配教員による進学へのサポート .....	34
第6章 考察・参考文献.....	35

## 第1章 問題関心

近年、日本国内における外国人の移住が年々増加している中で、それに伴い外国人生徒の教育的問題が深刻化している。中でも特に深刻な問題として挙げられるのが、外国人生徒の高校進学率の低さである。青木(2013)によると、外国人生徒の高校進学率は一部の地方自治体を除いて全国的に公表されている正確なデータはないが、概ね5割前後だと言われている。これは日本人生徒の約98%が高校へ進学しているのに比べて、格段に低い状況である。

本来、高校進学は国籍を問わず、本人の意思に委ねられているものであるが、そこにはすでに日本国籍と外国籍との間に教育達成における格差が生じている。

そこで本稿では、外国人生徒の中でも、とりわけ高校進学率が低いと言われている日系ブラジル人生徒を対象に、外国人生徒の高等学校等への進学に関して影響を与えると考えられる家庭を含めた環境の特徴はどのようなものかについて調査を行っていく。

## 第2章 基礎概念と先行研究

### 第1節 日系ブラジル人の概要

本節では、日系ブラジル人生徒に関する問題について取り扱うため、初めに日系ブラジル人とは何かを記す。日系ブラジル人とは、両親の一方もしくは両方が日本人にルーツを持つブラジル人、または、日本国籍を持っていたがその後ブラジルに帰化した人物を指す。

外務省によると、2002年の日本国内における在日ブラジル人の人数は、約27万人であり、そのほとんどは主に就労を目的として来日している日系ブラジル人である(外務省、2004)。

また、富山県内においては令和3年1月の段階で、富山県の外国人登録者数は19,084人であり、これは県人口の1.82%を占めている。また、構成比を市町村別に見てみると、富山市が39.27%、高岡市が18.93%、射水市が14.43%と、これら3市のみで県内全体の72.63%の外国人が集中していることがわかる。日系ブラジル人においては、令和3年1月の段階で、2454人であり、これは外国人住民数の12.86%を占めている。このことから、高岡市は富山県の中では特に外国人が多く住んでいる地域の1つであるといえる。また、ブラジル人のみに関して言えば、高岡市に在住しているものの割合は他の市と比べて圧倒的に高い(富山県、2021)。

### 第2節 日系ブラジル人流入の変遷

日系ブラジル人の流入は、1980年代の「出入国管理及び難民認定法<sup>(1)</sup>」の改正に起因する。1980年代頃、日本企業の海外での経済的影響力の増大や円高などの要因を背景に、日本国内では、近隣アジア諸国から出稼ぎ労働者が急速に増加する。

1980年代末になると、バブル景気で深刻な人手不足となり、外国人労働者に対する需要が高まると同時に、ブラジルでの経済的不況が要因となり、1990年代に出入国管理及び難民認定法が改正される。この改正によって、日本国籍を持たない日系2世・3世及び、その配偶者は、「定住者」、「日本人の配偶者等」などの活動内容に制限のない在留資格が付与される。この資格は、ブラジル人をはじめとする、日系3世までの就労、定住が認められており、日本国内での活動が自由であったことから、主に「出稼ぎ」を目的として、多くの日系人が来日し、日本に滞在するようになった。戦前から、日本人はブラジル等の南米に多く移住していたことから、日本国内においても、多くの日系ブラジル人が流入していった。

その後、バブル経済崩壊により、当初、日系ブラジル人の多くは単身で短期の予定の来日であったが、次第に滞在は長期化し、家族の呼び寄せや、日本で日系人同士が結婚

をしたりして家庭を持つようになったこともあり、日本国内の公立学校に通う日系ブラジル人の生徒は年々増加している。

### 第3節 日系ブラジル人の移住形態

山本(2014)によると、日系ブラジル人の多くは、「出稼ぎ」として一時的に日本に来日し、来日当初の目標金額が達成され次第、帰国するといったような「一時的回帰の物語」を持つ。しかし、滞在の長期化によって次第に、家族の将来展望やライフスタイルは変容していき、来日当初予定していた「一時的回帰の物語」は、日本への定住を志向する「永住型」、居心地の良い日本での生活に身を任せる「根無し草型」、日本とブラジルを行き来する「リピーター型」へと家族の生活類型は分岐していくとしている。

### 第4節 一時的回帰の物語に関連した教育戦略

志水・堀家・酒井・家上・児島・堂寺(1999)によると、日系ブラジル人家族は、日本での滞在の長期化に伴う「一時的回帰の物語」の変容過程において、暫定的に日本社会で生活していることによって、生徒の高校進学に向けて、特定化された教育戦略を打ち出せないとしている。ここでの特定化された教育戦略とはどのようなものなのかは、具体的には明示されていない。そうした中で、かろうじて日系ブラジル人家族が取っていた教育戦略が、家庭での母語の使用・伝達に関しては、家庭内で母語を使用する他、ビデオや新聞などの母語メディアを利用するといった最低限の環境づくり。学校観・学校との関わりでは、日本の学校を、日本文化の伝達やそのような資源を獲得していくような場として期待し、生徒の進路への希望とそれへの対応という点では、市場価値のある「言語」の習得を生徒に奨励するといったような教育戦略を選択すると述べている。

### 第5節 日系ブラジル人生徒の学業不振の家庭的背景

志水・清水(2001)は、神奈川県と愛知県に在住する日系ブラジル人の家族を対象に行ったインタビュー結果から、日系ブラジル人生徒の高校進学における学習困難の家庭的背景として以下二点を指摘している。

第一に、日系ブラジル人生徒の家庭内において、生徒の教育に対する親の関与が不十分になりがちな状況にあることである。とりわけ、日系ブラジル人生徒の親は、日本や韓国など受験競争の激しい国の教育文化の経験や、それに関する知識が十分でない場合が多く、日本の複雑な入試制度や受験システムの理解が容易ではない。そのため生徒の

進路選択において十分な助言を行えず生徒に任せっきりの状況を作り、結果的に生徒の負担になってしまっている。

第二に、家庭内において、生徒の教育達成に向けた具体的な教育的取組が行われていないことである。「出稼ぎ」を目的として来日する日記ブラジル人の家族は「帰国」を前提としながらも現実的には滞在が長期化しつつあるという現状があり、滞在の長期化に伴って、滞在期間や将来の居住地が不明確になりやすい傾向がある。そのため、将来の問題である生徒の進路に関しても具体的な展望が持てず、家庭内においても高校進学に向けた具体的な教育的取組を行えずにいる。しかし、志水・清水(2001)において、高校進学に向けた具体的な教育的取組とはどのようなものなのかは不明である。

先行研究から、出稼ぎとして来日した日系ブラジル人家族は、「一時的回帰の物語」の揺らぎの中で、児生徒に対して限られた教育戦略しか行えず、また、生徒の学習や高校進学においても、親自身の関与や高校進学に向けた具体的な教育的取組が欠如しており、結果的に、それらが生徒の教育達成にも影響を及ぼしていることが指摘されている。このように、先行研究では、生徒の教育達成において、親の関与や、高校進学に向けた具体的な教育的取組など、「親による生徒の教育への参加」が重要視されており、親の影響によって生徒の教育達成は左右されてることが示唆されている。

### 第3章 アレッセ高岡への調査概要

#### 第1節 フィールドワーク

2020年の9月から2022年1月にかけて、アレッセ高岡(高岡外国人の子どものことばと学力を考える会)というボランティアグループに参加することで、日系ブラジル人生徒が家庭内において抱える悩みや、問題について調査を行った。具体的には、アレッセ高岡が行う週2回の学習支援事業(主に基本5教科をアレッセ高岡が用意したテキストや学校の教科書等を用いて指導するといった内容)に講師たちのアシスタントという形で参加するといった内容である。

また、上記に加えて、アレッセ高岡の代表者である青木由香氏にもアレッセ高岡の概要についてインタビュー調査を行った。

#### 第2節 アレッセ高岡の概要

『高岡外国人の子どものことばと学力を考える会』通称、アレッセ高岡  
アレッセとは Associação dD Apoio LinFuístico D Dducacional para Crianças DstranFDiras dD Takaoka (ポルトガル語)の略である。

##### <主な活動内容>

アレッセ高岡の活動は、主に学習支援事業と情報支援事業に大別される。学習支援事業では、高岡市に住む外国人の中高生に対して行う、講師やボランティア学生による週2回の学習支援である。その内容は、定期試験の対策や高校進学に向けた受験対策、学校で出される宿題の手伝いなどである。教材は、アレッセ高岡が所有している教材を使うこともあれば、それぞれ講師ごとに用意して指導を行うこともある。今年度では、新型コロナウイルスの流行により、週2回オンラインでの学習支援も行っており、対面での学習支援と並行して活動を行っている。

情報支援事業では、2010年から毎年、富山県内の様々なボランティアグループやボランティア有志との協働で、多言語(英語、日本語、ウルドゥー語、ポルトガル語、中国語)の高校進学説明会を年に2回、富山県の東西に分けて開催している。また、2014年からは、外国人の人々が日本で生活していく上で必要な子育てや教育、キャリアデザインに関する多言語資料の作成・配布を行っている。

また、上記に加えて、2020年からは「CLD (Culturally and LinFuistically DivDrSD) 青少年のための市民性教育プログラム」と題して、「文化的言語的に多様な背景を持つ子ども」を意味するCLD青少年が、地域社会への積極的な参加や、地域の課題に対して主体的に社会参画していくために育成することを目的に、CLD青少年を主体としたワークショップや、フィルムフェスティバル等を行っている。

#### <活動目的>

外国にルーツを持つ生徒たちが、中学校段階でのドロップアウトを防ぎ、ハンディを乗り越えて志望校に進学できるよう支援することによって、将来的に彼らがよりよい職を得て、社会に貢献し、日本と自国との懸け橋となるよう育成すること。

#### <設立>

2010年4月

#### <学習時間>

毎週2回(火曜日 17:00-19:00 土曜日 9:30-11:00/13:00-15:00)

※オンラインの場合は、水曜日 17:00-19:00 土曜日 15:30-17:30

#### <学習場所>

ニッセンビル 1E

#### <運営>

資金調達：授業料(月額 3000 円)、助成金及び教材寄付で運営。

使い道：①講師への謝礼と交通費②コピー代など

#### <構成(2021年1月の時点)>

・講師 10 名。アレッセ高岡設立当初は日伯交流友の会のメンバーのみであったが、以降は主に口コミによって募集を行っている。講師は退職教員、現役教員、塾講師などによって構成されている。

・2020年12月時点で生徒 20 名(ブラジル 14 名、パキスタン 2 名、ロシア 2 名、中国 1 名、ペルー 1 名)。中学生がほとんどだが、高校生も在籍している。アレッセが設立した当初は、ブラジル人生徒 4 人のみであった。その 4 人は、代表の青木由香氏が中学校で外国人相談員をしており、そこで指導をしていた生徒である。生徒の募集については初年度のみチラシによる募集を行った。以降は口コミによって募集を行っている。

#### <支援協力団体>

- ・日伯交流友の会・公益財団法人とやま国際交流センター・国際ソロプチミスト高岡
- ・北陸労働金庫・富山南米協会・松翁記念財団
- ・日本国際交流センター

#### <設立の経緯>

青木由香氏が、外国人相談員として、高岡市内の日本語指導が必要な外国人生徒が在

籍する小中学校を巡回しながら指導をしてきた経験から、1つの学校に割くことができる時間数や、それぞれの生徒に対して行えるサポートの質に限界を感じ、仕事の枠を超えて団体を設立することを決意した。その後、青木由香氏が参加していた日伯交流友の会というボランティアグループの活動の中からアレッセ高岡として2010年4月に新たに独立した。

#### <日伯交流友の会>

2008年のブラジル移民100周年記念事業で集まったメンバーが、高岡市にブラジル人が多く住んでいるということから支援の必要を感じたことから設立したボランティアグループで、学校外での支援の必要を感じたことから、外国人生徒を支援するボランティアで、情報交換・支援事業・交流事業などを通して、会員及び日本・ブラジル両国の相互理解を深め、安全で暮らしやすい地域作りに貢献することを目的としている。2008年のリーマンショックによりブラジル人が大量に失業した際に、食糧支援や情報提供などの支援を行った。それらが一段落した段階で、青木氏が子供の教育支援について提案したことが、アレッセ設立のきっかけとなった

#### <アレッセ高岡代表者青木由香氏>

生まれと育ちは高岡市。横浜国立大学と大阪大学で修士号を取得。その後、2年間JICAの日系社会青年ボランティアとしてブラジルに渡る。その中で日本とブラジルを行き来している子供たちの現状を目の当たりにし、そのような子供たちを放っておけないという考えを持った。そういった子供たちのもつ問題というのは以下のようなものだ。彼らはブラジルにいる時は日系人は「日本人」として見られ、ステータスは高い。しかし、日本に来ると日系人は「ブラジル人」として見られ、逆にステータスは低くなる。そのような状況の中で、言葉も勉強も中途半端になってしまい、夢や目標を持つことが難しくなっている

青木氏はこのような問題を持つ子供たちを救いたちという気持ちから、日本語の相談員になったが、それだけでは足りないと考え、アレッセ高岡を設立することを決意した(柳本、2012)。

## 第4章 日系ブラジル人生徒への調査概要

### 第1節 インタビュー調査

2022年1月時点において、アレッセ高岡のフィールドワークに参加する中で出会った生徒たちの中から日系ブラジル人の生徒6名(高校1年生3名、高校2年生2名、卒業生1名)を対象に、家庭内での学習困難や、高校進学する上での家庭内の状況についてインタビュー調査を行った。

### 第2節 調査対象者

#### 第1項 Aさん

Aは、男性で、現在、16歳の高校2年生(定時制)である。Aは、5人家族で、Aの他に、44歳の父親と、41歳の母親、22歳の姉と、14歳の妹がいる(2022年1月24日時点)。父親は18歳、母親は20歳の頃に、出稼ぎとして日本に来日しており、来日後に、2人は出会い、結婚し、Aが出生する。父親は、来日前、ブラジルの専門学校に通っていたが、日本への来日のために、休学し、その後退学している。母親は、専門学校を卒業した後日本に来日した。

Aの高校進学について、Aは、元々、中学校を卒業した後、専門学校に通うことを検討しており、中学3年生になるまで、高校進学を予定していなかった。しかし、富山県内において、自身が志望する専門学校が、高校卒業の資格が必要だったことから、高校への進学を決断した時期が遅れてしまい、最終的に中学3年生の頃に初めて、高校進学を決意する。

しかし、中学3年生になるまで、高校進学を予定していなかったことから、それまで、高校進学に関する情報や、進学先に合格するほどの学力が不足していた。そうした中で、Aは、既に日本の高校への進学を経験していた姉を、積極的に頼っていた。Aは、姉から、勉強を教えてもらったり、進学先について相談に乗ってもらうことで、高校進学を乗り越えようとしていた。

Aの両親も、Aに対して日本語能力の不足もあったことから、直接的に勉強を支援することは出来なかったが、Aに対して勉強してほしいという思いから、Aに対してアレッセ高岡への参加を勧め、Aも、姉がアレッセ高岡の卒業生であったことから、姉と同じように、アレッセ高岡への参加を決めた。最終的にAは、姉の出身高校に進学することを決意し、無事合格している。

#### 第2項 Bさん

Bは、16歳の男性で、国籍はブラジル。Bは、日本とブラジルのハーフである父親と、ブラジル人の母親のもとに生まれ、両親の他に、現在、通訳として働いている姉(E)がいる。年齢はそれぞれ、父親が56歳、母親が43歳、姉(E)が22歳である(2022年1月24日時点)。

現在、父親は車関連の工場に勤務しており、母親は車の部品を製造する工場に働いていたが、母親は、コロナウイルスの影響で解雇され、現在は無職である。姉(E)は日本の中学校と高校を卒業し、現在、通訳として働いている。親の日本語能力については、Bによると父親はほぼ完璧に近いが、母親は全くできない。

Bは日本生まれ日本育ちであり、生まれは広島県である。Bが出生した当初は、父親と母親、そして姉と共に生活していたが、リーマンショックの影響で、母親が失業し、出生からわずか3カ月ほどで、日本に父親を置いて、ブラジルに移住することになる。その後、4年間ブラジルでの滞在を経て、再び、日本への来日を決意し、母親と姉とBで、福井県に移住する。その後は、福井県での滞在を経て、Bが小学校5年生の時に現在の居住地である富山県高岡市へと移住した。

その後、Bが高校進学を迎える段階においては、B自身、このような複数回に渡る移動を経験していたものの、中学3年生の時には、既に日本での長期間に渡る滞在を経験していたことから、普段の生活の中で、自身の日本語能力に困ることはなかったそう。しかし、日常的な会話はできるものの、国語の授業のような複雑な日本語を使用する科目においては、まだ、困難を抱えており、Bは、当時の自身の国語の成績は、かなり低かったと振り返っている。

そのような中で、Bは自身が高校進学する上で、自身の姉(E)を頼りにしていたそう。Bは姉(E)に対して、自身の志望校に関する相談をしたり、勉強を教えてもらったりしており、姉(E)は、既に日本での高校進学を経験し、また、日本語能力にも長けていることから、B自身が進学の中で困難を抱えた際には、家庭内において1番に頼っていた。Bの両親も、Bの進学について関心を持っていたが、姉(E)とは異なり、日本語能力や高校進学への情報が不十分であったため、日本語能力を必要としない数学の科目において、勉強を教えたり、アレッセ高岡に通わせたり等、Bが志望校に合格するように、可能な範囲で支援を行っていた。B自身も、アレッセ高岡への参加には意欲的であり、Bから両親に志願した。こうして様々な苦難を経て、Bは、自身が志望していた高校に合格することができた。

### 第3項 Cさん

Cは、男性。17歳の高校2年生で、国籍はブラジル(2022年1月24日時点)。Cは、43歳の母親と47歳の父親、23歳の姉と小学5年生の妹の5人家族で、父親は2年前に

母親と離婚しており、現在は別居している。父親と母親は共に、16歳の頃に、それぞれ出稼ぎとして来日し、その後2人が日本で出会い、結婚している。Cは、母親が26歳、父親が30歳の頃に出生した。

現在、父親は車関連の企業に勤務しており、母親は工場で働いていたが、コロナウイルスの流行によって解雇され、現在、母親は無職である。姉は、日本の専門学校を卒業した後、現在は、会社員として働いている。親の日本語能力に関して、父親は、話すことや聞くこと読むことができるが、書くことは少ししかできない。母親は、日本語の読み書きや聞いて理解することはできないが、カタコトで話すことはできる。

#### 第4項 Dさん

Dは女性で、15歳の高校1年生である(2022年1月24日時点)。Dは4人家族で、両親とDの他に19歳の姉がいる。Dの実父は、Dが6歳の頃に母親と離婚しており、現在Dは、義理の父親と母親と共に生活している。両親は共にブラジル出身であり、それぞれ義理の父親が44歳、母親が40歳である。Dは日本生まれ日本育ちで、三重県出身だが、3歳の頃に1度、ブラジルに移住している。移住後は4歳までブラジルにて生活し、Dが5歳の頃に、Dの出身地である三重県に移住し直した。その後、Dは小学1年生を修了した後、再び、ブラジルへと移住し、小学2年生から小学5年生までの間、ブラジルで生活する。そして、Dが小学6年生になった頃に、親戚が住んでいる群馬県へと移住、その後、1か月の滞在を経て、千葉県へと移住し、そこで7か月間滞在した後、現在の移住先である富山県へと移住した。

Dは、このような複数回に渡る移動の中で、自身が困難に感じたこととして、学校での教科学習の違いについて挙げており、Dは移動を終えるまで、長期間、日本に滞在していなかったことから、日本語能力が不十分であり、また、転校する学校においても、それまで学んでいた教科学習の内容とのズレがあったことから、学校の学習内容が中々頭に入らなかったそう。Dはそうして、高校進学を迎えることになるが、Dは、自身が高校進学をする上で、助けになった存在として、姉を挙げており、自身の進学先も、元々姉が通っていたこともあり、進学先の高校について相談を受ける中で、その高校への受験を決めた。

#### 第5項 Eさん

Eは、22歳の女性で国籍はブラジル。Eは、日本とブラジルのハーフである父親と、ブラジル人の母親のもとに生まれ、両親の他に、現在高校1年生の弟(B)がいる。

Eが最初に日本に来日したのは中学3年生の頃である。来日した当初、入学した中学校では、既に、同学年の生徒たちは高校受験の時期であったことから、Eも来日間もな

くして高校受験を迎えることになる。しかし、当時の E はまだ、日本に来日してから 1 年も経っていないことから、日本語能力や一般的な学力が同年代の生徒よりも不足していた。当時の経験について E 自身も、当時の日本語能力は、読み書きは勿論、日本語の理解力においても乏しく、定期テストの問題文すらも、まともに理解できなかったと語っている。また、上記に加えて、E は家庭内においても困難を抱えており、当時、E の親は仕事で忙しく、親からは、毎日必ず、勉強するようにと言われていたが、実際には家庭内において、E に対して勉強や進学をサポートしてくれる人はおらず、進学においては孤立していた。

しかし、そんな時に、E が頼りにしていたのは加配教員<sup>(2)</sup>の先生であり、E の学力が伸び悩んでいた時や、将来の進路について不安を抱えていた時に、積極的に進路相談に乗ったり、時に励ましたりすることで、E のサポートをしてくれていたそう。当時 E が志望していた高校は、福井県の定時制高校であり、その高校において、日系ブラジル人生徒の受け入れ実績があり、当時姉が在籍していた中学校でも、過去に複数の日系ブラジル人生徒がその高校に進学していたため、最終的に、E もそのような生徒たちの進路をなぞるような形で、福井県の定時制の高校に進学した。E はその後、3 年間高校に在籍した後、卒業し、現在は、富山県で通訳として働いている。E のこうした高校進学において、困難を乗り越えた経験は、その後の弟の B が高校進学を迎える上でも活かされており、E は B に対して、自分と同じような進学での挫折をしてほしくないという思いから、B に対して高校受験の勉強や進学でのサポートをしていたそうで、B もその後無事に高校進学を果たしている。現在は、高校を卒業した後、通訳として働いている。

## 第 6 項 F さん

F は、高校 1 年生の 16 歳である。F は、45 歳の父親と 43 歳の母親、中学 3 年生の弟と、中学 1 年生の妹の 5 人家族である。F の出身は、ロシアであり、母親も同様であるが、父親はブラジルと日本のハーフである。両親は数年前に離婚しており、現在 F は、母親と共に生活している。F の両親は、それぞれ父親が 16 歳、母親が 24 歳の頃に日本に来日している。来日当初は、お互いで出稼ぎを目的として日本に来日しており、滞在する中で、2 人は出会い、結婚した。その後、ロシアにて、F が出生する。F の生まれはロシアであるが、1 歳頃に日本にへの来日しており、4 歳まで、富山県富山市にて滞在していた。その後、富山市から小杉へと移動し現在に至る。

F は、幼少期の頃から、日本に滞在していたこともあり、日常会話程度の日本語能力は持ち合わせていたものの、生まれつき身体的に虚弱であったことから、中学校の時に不登校気味になっていた。そうした中で、F は、高校進学を迎える中で担任の先生に良く気にかけてもらっていた。F は、担任の先生と特に、進学先の相談や、進学先の試験科目であった面接の練習を定期的に行っていた。母親も、担任の先生と同様に、F の進学について気にかけており、F が進学を諦めようとしていた時に、良く励ましてくれていた。

しかし、日本語が不十分であることや、日本の教育への理解が乏しいことから、F にアレッセ高岡を紹介したりしていたものの、直接的に学習を手伝うことはできなかったそう。

## 第5章 分析

### 第1節 親の移住の動機

親がどのような経緯でブラジルから日本へと移住してきたのかに関して、分析対象となったすべての生徒が、親は経済的理由によってブラジルから日本へと移住してきたと語っていた。以下はAの父親が、どのような理由から母国の専門学校を休学し、日本に移住してきたのかについての語りである。

<A>

インタビュアー：お父さんってブラジルにいた時に、高校とか大学って行ってたの？

A：お父さんは本当は日本に来て、お金を稼いで、なんか一回大学？専門学校か、専門学校を途中にして一回日本来たんすよ。

インタビュアー：一旦専門学校辞めたんだ。

A：途中で一回なんか、一回ここでストップして専門学校のためのお金稼いでまた戻りますみたいな言っって、それで日本に来て、お金を稼ぎに来たんですよ。それですぐブラジルに戻る予定で、どんどん長引いて長引いて、それでずっと日本にいます。

インタビュアー：あー、お金を稼ぐためにね。

A：そうです。なんか結構外人、外国のみんなって日本がお金を稼ぎやすいと思って日本来るんですよ。それでも、現実をみたらそんな感じじゃないって。

Aの「専門学校のためのお金稼いでまた戻ります」という発言から、Aの父親は、専門学校に通うためのお金を稼ぐという経済的な理由から日本に来日している。しかし、Aの「現実をみたらそんな感じじゃないって」という発言が示すように、来日当初の目的は達成できていない。来日時は、出稼ぎという一時的な滞在を予定していたにも関わらず、現実的には来日当初の目的を達成することが困難な状態にあり、その間徐々に滞在が長期化していくことによって、最終的にAの父親は、母国の専門学校を中退し、日本での定住を選択している。このように、日系ブラジル人の多くは、出稼ぎとしてあらかじめ定められた目標金額を想定して日本に来日して来るものの、外的な要因から、結果的にそのような目的は達成されず、滞在が長期化していく現状がある。

## 第2節 地域間移動

また、第1節で述べたようなブラジルから日本といった国家間に渡る移動に加えて、Aのような高岡市から射水市への移動や、Bの福井県から富山県への移動といった来日後の地域間移動もあった。このような地域間にまたがる移動は、生徒の学習からの離脱をもたらすことも少なくない。以下は、地域間の移動による影響についてのAの語りである。

<A>

インタビュアー：あのさ、高岡から射水に移動したんやよね？

A：そうっす。

インタビュアー：その時に困ったことってあった？

A：ありましたね。前のおった学校はいろんなブラジル人がいたんですよ。4人。俺合わせて4人と。パキスタン人もちゃんとおった。外国人がいたんすよ。でも転校したところは、外国人俺合わせて2人で、その1人は不登校なんすよ。3年間のうち1回も来てなくて。だから外人1人でめっちゃいじめられたんすよ。だから、転校生で外人や一つでめっちゃいじめられて。だからいじめられて、なんか殴られたら殴り返すみたいで、勉強も前の中学よりも今の中学の方が進み早くて、あー、これやってないわみたいななっと思って。ガチで。めっちゃ早かったんすよ勉強スピードが。もうひと授業で教科書3枚とか。早くて。前の授業が1授業1枚だったんですよ。で、きつかったっす。勉強も。馬鹿だから理解がめっちゃ遅くて、結構きつかったっす。

インタビュアー：じゃあ、勉強と友人関係がきつかったんだ。

A：きつかったっす。で、その学校ついてけんだから、学校行く気持ちもなくして。一週間まるごと休んだり、結構きつかったっす。

Aの語りから、Aは、地域間の移動に伴う転校によって、それまで積み重ねてきた友人関係や学習に支障をきたし、結果的に不登校となってしまった。日系ブラジル人生徒の場合、このような地域間に渡る移動が繰り返されることによって、生徒の学習の積み重ねを困難にするだけでなく、言語や文化の違いゆえに、ただでさえ時間のかかる他の同級生との関係づくりへの意欲を減退させてしまう可能性がある。結果的に、学習や、同級生との関係づくりも諦め、学校そのものから離脱するということになりがちである。

### 第3節 移動に伴う教育上の困難

このような地域間移動に伴う困難に加えて、ブラジルから日本へと国家間移動を経験しているDは、ブラジルで小学校を卒業した後、日本の中学校に進学するといった国家間の移動に伴う学校の変化について以下のように述べている。

<D>

インタビュイー：ブラジルの小学校から、日本の中学校に行くってどんな感じなん？

D：結構きついよ(笑)。

インタビュイー：どんなふういきついん？

D：なんか国語とかまず意味分からんし、社会とかも、日本住んでなかったから分からなかった。

Dの語りからも分かる通り、Dは、日本の学校教育の中でも、特に国語や社会といった日本語が必要な科目において困難を抱えており、また、それらの科目はDの母国語であるポルトガル語を必要としないため、それまでブラジル学んできた内容を活かすことが難しい科目である。そのため、全く日本での教育の下積みが無いDにとっては、それらの科目を日本語が不十分な中で、学習していくことは困難である。また、その間、中学校で学年を経ていく内に、学習する内容も高度になっていくことから、Dのような、ブラジルから日本といった国家間の移動に伴って、学校を変更する生徒は、他の生徒に比べて、学習不振に陥りやすい。

#### 第4節 生徒の学習における親の影響

##### 第1項 生徒の学習への不十分な関与

出稼ぎとして来日してきた日系ブラジル人は、生徒の教育に対してどのような影響を及ぼすのか。今回、インタビューを行った生徒の中で見られたこととして、親は、生徒にとって重要な将来の進学に対して、様々な理由から十分に関与できていない現状があることである。以下は、高校進学する上での親の関与についてのA、B、Cの語りである。

<A>

インタビュアー：お父さんお母さんって日本の学校について理解しとるん？

A：よく分かんないです。

インタビュアー：じゃあ、高校選ぶ時って＝

A：＝選ぶときは全然役立たないです(笑)。

<B>

インタビュアー：お父さんお母さんって高校進学する上で、Bになにかしてくれたりとかあった？日本の高校教えてくれたりとか。

B：いや、わからない。

インタビュアー：あ、わからないんだ。日本の学校について。

B：あんまり分かってない。

インタビュアー：じゃあ、基本Bに任せる感じ？

B：そう。

<C>

インタビュアー：Cのお父さんお母さんって、高校進学する上で、こういう学校あるよとか教えてくれた？

C：ない。もう自分で探せって。

A、B、Cの語りから、両親は生徒の高校進学に対して、十分に関与できておらず、結果的に高校の選択を生徒に放任していることが分かる。とりわけ、今回インタビューを行った生徒の親は、日本の学校での教育経験に乏しく、また、日本語能力も日本人と比べ劣っていることから、生徒の高校進学に対して十分に介入できず、結果的に生徒に任せっきりの状態を作り、生徒の負担となっていた。

## 第2項 生徒の学習への意欲的な態度

第1項のような、親は、生徒の高校進学において十分に関与できていない現状はあるものの、生徒の学習に関しては意欲的である。

<C>

インタビュアー：親はさ、Cに勉強してほしいと思っとるんかな。

C：思っとる。

インタビュアー：そうなんや。それってそういう風に分かる？

C：いや、勉強にしろってうるさいです。

Cの「いや、勉強にしろってうるさいです。」と発言していることから分かるように、Cの親は、Cの学習に対しては、「勉強を指示する」という形で積極的に介入しており、決して無関心ではないように思える。

また、上記の他に、生徒の学習に対する親の介入として挙げられたのが、「勉強を教える」という形での関与である。以下は、親に勉強を教えてもらったことがあると話す、Bの語りである。

<B>

インタビュアー：お父さんに勉強教えてもらったことある？

B：ある。

インタビュアー：お父さんに勉強教えてもらう時ってどの科目教えてもらうの？

B：数学と国語、国語は違うか。主に数学。

インタビュアー：英語について教えてもらったりとかない？

B：ない。あっち全く分からんと思うから。

Bの語りから、Bの親は、「勉強を教える」という形でBの学習に関与していることが分かる。しかし、Bの「あっち全く分からんと思うから。」という発言が示す通り、親の学力や日本語能力などによって、少なからず、親が生徒に教えられる学習内容には限界があるようだ。

以上、生徒の進路選択や、学習に対する親の関与についての生徒の語りを概観してきたが、日系ブラジル人生徒の親は、日本語能力の不足や、日本の学校での教育経験の欠如などにより、生徒の進路選択に介入できていない現状はあるものの、生徒の学習に対しては意欲的であり、「勉強を指示する」ことや、「勉強を教える」という形で、積極的に生徒の学習に関与しようとしていた。しかし、「勉強を教える」ということに関しては、親の学力や、日本語能力、日本での教育経験の不足などによって限界もあり、生徒の学

習に十分なサポートは出来ない部分はあるのではないか。

## 第5節 進路意識における親子間の不一致

本節では、日系ブラジル人親子における、進路意識の不一致について分析を行っていく。とりわけ、これまでインタビューを行ってきた生徒のうち、いくつかの生徒は、親の将来設計と生徒自身の将来への思いとの間にズレが生じていた。そこで、本節では最初に生徒自身の進路意識について分析を行っていく。以下は、自身の将来設計について話すBとDの語りである。

<B>

インタビューー：Bって高校卒業した後は日本で就職とかって考えとるん？

B：考えとるかな。

インタビューー：どういう職業とかある？

B：自衛隊かな。

インタビューー：そうなんや。

<D>

インタビューー：Dって将来どういう仕事に就きたいん？

D：んー、漫画家かな(笑)。

インタビューー：へー、じゃあ日本で漫画家になりたいん？

D：まあ、今のところ。

BとDの語りから、2人は、自身の将来の人生設計について、日本での就職を希望しており、日本での進路形成を行おうとしている。2人がこうした考えを持つのは、長く日本で生活し、現在も、日本の学校に通って教育を受けているため、自身の将来設計も日本で行おうとするのは当然である。

しかし、BとDとの将来への思いに反して、2人の親は、将来的に、日本に滞在し続けることは考えておらず、日本での一定程度の滞在を終えた後、母国への帰国を考えている。以下は、将来の滞在期間について話すBとDの語りである。

<B>

インタビューー：Bって日本来た時いつまで日本にしようとか決めとったん？

B：あー、なんか母さんが母さんが高校卒業したら帰るってなんとなく言ってる。

インタビューー：そうなんや。

B：でも、本当に帰るかどうかはまだ決まってない。一応予定としてはそこ。

<D>

インタビューー：Dってこれからも日本で生活していくん？

D：んー、分かんない。

インタビュイー：まだ決まってないってこと？

D：なんかお母さんは、帰るって言っとるけどどうなるか分からん。

BとDの語りから、2人の親は、帰国時期については、明確には決まっていないものの、いずれは母国に帰国しようと考えているようである。こうして、BとDは、日本での進路形成を意識し、将来設計を考えているのに対して、2人の親は、時期は不明ではあるが、いずれ帰国しようとは考えており、親子間での将来設計に、ギャップが発生している。

こうした、親子間において将来設計のギャップが生じてしまう要因として挙げられるのが、日系ブラジル人家庭における将来設計の曖昧さである。第4章第1節でも述べたが、日系ブラジル人は、あらかじめ定められた目標金額を想定して、出稼ぎとして日本に来日するものの、実際はそのような目標は達成されず、結果的には滞在が長期化していく現状がある。そうした場合、滞在の長期化に伴って、しだいに今後の滞在期間が不明確になり、親子間で、将来の進路意識に対する齟齬が生じてしまうのではないかと考える。加えて、日系ブラジル人の親は、日本の教育制度を十分に理解していない場合が多く、そのため、生徒の進路選択においても生徒自身に放任してしまうため、親子間で生徒自身の進路についての十分な話し合いがされていないのではないかと考える。

## 第6節 日本での学習・進路選択に関わるきょうだいの存在

### 第1項 生徒の高校進学を支援する役割

これまでインタビューを行ってきた生徒たちの多くは、教育に対する関心はあるものの、日本の教育に関する知識や、高校進学のための情報を持ち合わせていなかった。しかしそうした中で、いくつかの生徒は、日本での学習や進学を適切にガイドする役割を担う存在としてきょうだいを挙げている。

<A>

インタビュアー：お父さんお母さんって日本の学校について理解しとるん？

A：よく分かんないです。

インタビュアー：じゃあ、高校選ぶ時って＝

A：＝選ぶときは全然役立たないです(笑)。高校選ぶときに一番役立ってくれたのは姉ちゃんですね。姉ちゃんはもう専門学校にいて、高校は行ってないけど。でも、行ってない分なんか弟を手伝おうみたいな気持ちが、なんか姉ちゃんから聞いて、それでけっこう手伝ってくれました。

インタビュアー：じゃあ、高校進学する上で、お姉ちゃんを見習っている部分は＝

A：ありますね。

<B>

インタビュアー：お父さんお母さんって高校進学する上で、Bになにかしてくれたりとかあった？日本の高校教えてくれたりとか。

B：いや、わからない。

インタビュアー：あ、分からないんだ。日本の学校について。

B：あんまり分かってない。

インタビュアー：じゃあ、基本Bに任せる感じ？

B：そう。

インタビュアー：じゃあそういう時ってお姉ちゃん存在って大きい？

B：大きい。就職もしとるし高校卒もしてるし、やっぱりお姉ちゃんの学力っていうのが良いから、たぶん、なんか分かんない時に教えてもらうことはけっこうある。

<C>

インタビュアー：中学の時、姉と日本の高校の話ってしてた？

C：しとった。

インタビュアー：姉に色々教えてもらってたんや。

C：教えてもらっとった。

インタビュアー：そういうのってお父さんお母さんに聞かないの？

C：だってなんも分からんもん。学校行ってないし日本の。

インタビュアー：え、それってCにとって結構負担になっとった？

C：いや。

インタビュアー：それは、日本の学校のことについて分からないことはあるけど、親に聞けないっていうのは、やっぱり姉がいるから姉に教えてもらえばいいかなっていうこと？

C：うん。だいたいそう。

インタビュアー：じゃあ進学する上で姉の存在って大きかった？

C：うん。

Aの「高校選ぶときに一番役立ってくれたのは姉ちゃんですね。」という発言や、Bの「やっぱりお姉ちゃんの学力っていうのが良いから、たぶん、なんか分かんない時に教えてもらうことはけっこうある。」という発言、Cの「教えてもらっとった」という発言からも分かる通り、姉の存在が、生徒の進路を水路づける役割をし、生徒の学習を手助けする存在として位置づけられている。また、Cが高校進学する上で、姉の存在は大きかったと考えているように、生徒は、自らの進路を選定したり、学習をしていく上で、親よりもむしろ日本の学校での教育経験のある姉の存在を頼りにしていることから、生徒の教育達成においてきょうだいの影響は大きいと考える。

## 第2項 進路のモデルとしての役割

第1項の事例に加えて、Dは、自身の進学先を選定する上で、姉を、自身の進路形成におけるモデルとして捉え、姉と全く同じような進路選択を行っている。以下は、CとDが、どのようにして自身の進路選択を行ってきたかについて話すC、Dの語りである。

<C>

インタビュアー：Cが高校行こうと思ったとき、なんでその高校に行こうと思ったの？

C：あの、姉がその高校出身で、そっからなんかいろいろ聞いて、で、自分もそこ行こうと。

インタビュアー：そうなんや。

<D>

インタビュアー：進学先ってどうやって決めたん？

D：お姉ちゃんが行ったから。普通にお姉ちゃんが行ったから行ったん（笑）。

インタビュアー：そうなんや。じゃあ、高校進学する時もお姉ちゃんからいろいろ教えてもらったん？

D：はい。面接のときもそのこと話しました。それで入りました（笑）。

インタビュアー：じゃあ進学する時ってお姉ちゃん存在って大きかった？

D：うん。

Cの「姉がその高校出身で、そっからなんかいろいろ聞いて、で、自分もそこ行こうと」という発言や、Dの「お姉ちゃんが行ったから」という発言から分かる通り、C・Dは、自身の進路選択において、姉をモデルとして捉え、姉が辿ってきた進路をなぞるような形で、進路形成を行っている。第1項でも示した通り、日系ブラジル人生徒の場合、「きょうだい」の存在が、生徒の進路形成に大きく作用し、生徒の進路を方向付ける役割を果たしている。これはすなわち、日系ブラジル人生徒が、自身の進路を選定するにあたってのモデルとなる存在が、「きょうだい」といった身近な人物に限定されうることを意味する。そのため、日系ブラジル人生徒が自身の進路を選定するにあたって、高校間の学力の格差や、就職・進学等への有利・不利はほとんど認識されず、「きょうだいが行ってるから」といった価値基準が優先されている。

## 第2節 きょうだいの不在の中での教育戦略

本節では、先に述べていた兄弟がいた中での高校進学に向けた取組みではなく、そのような手助けとなる存在が不在している場合における事例について分析を行っていく。本節で取り上げるのは、E、Fの事例である。Eは、Bの姉であり、Eが高校進学を迎えた当時、Eの家庭内において、自身の進路形成を手助けしてくれる存在や、進路選択のモデルとなる人物も不在であった。

また、Fも同様に、きょうだいはいるものの、家庭内において、A、B、Cの姉のような、既に高校進学を経験しており、また、自身の進路選択におけるお手本となる存在がいなかった。そのような中で、E、Fはどのようにして高校進学における困難を乗り越え、進学を達成していったのか。

## 第1項 E と F の高校進学における困難

E の高校進学における困難として、E の生活史から、浮かび上がってきたのは、来日して間もない時期に高校受験の迎えてしまったことによる、E 自身の日本語能力及び学力の不足である。高校進学を達成する上では、当然、中学レベルの学力は勿論のこと、基本的な日本語能力の保持は必須条件となるが、当時、中学3年生だった E は、中学レベルの学力以前に、日本語能力すら十分に備わっていなかった。E は当時の自身の日本語能力について以下のように語る。

<E>

インタビュアー：中学3年生の時の日本語能力ってどうでした？

姉：全くできなかったですね。やっぱりその時の日本語能力は、読み書きも、理解力も今より結構厳しかった。

E の語りからも分かる通り、E は、日本に来日してまだ1年も経っていなかったため、当然ではあるが、日本の高校に進学できるような日本語能力は、持ち合わせていなかった。

また、E のような日本での短期的な滞在年数に関係なく、幼少期の頃から、日本に居住し、生活している F に関しても、自身の高校進学において、日本語能力の不足による困難を抱えていた。

<F>

インタビュアー：受験する時って困った事ってあった？

F：やっぱ勉強もそうだけど、なんか作文かかなきゃいけないみたいだったので、それがちょっと心配だった。私、日本語書くのがすごい苦手で、語彙力がないから、それが心配だったし、面接も、会うと目合わせられなくて、緊張しちゃって、うまくしゃべれなくなる。

このような E と F の日本語能力の不足に加えて、E は、中学校段階の授業で学ぶ内容に関しても、日本とブラジルでは、大きく異なることを語っており、その学習内容の違いに苦戦していた。

<E>

インタビュアー：ブラジルと日本ってやっぱり学校で学ぶ内容も違うんですか？

E：そうですね。まあ、国語はそもそもあちは日本語使わないんで違うし、あと社会とかも全然内容違うので、勉強するのが大変でした。

E の語りからも分かる通り、E は日本とブラジルでの教育内容の違いから学習において支障をきたしており、それは特に、国語と社会といった、日本語能力を要する科目において困難を抱えていた。

E のように、日本とブラジルの両国間における学習内容の違いにおける困難に対して、F は、自身の体調不良から、不登校気味だった中学校生活の中での、高校進学に向けた学習の困難について以下のように振り返っている。

<F>

インタビュアー：F が高校進学する時、学校の授業とかが役に立った？

F：いや、なんか学校ほとんど休み気味だったので、逆になんか結構行ったのは部活で、その、私美術部に入って、そのちゃんと部活だけは真面目にやりました。学校はあんま行かんかったけど。

インタビュアー：じゃあ、学校の先生に勉強教えてもらったとかもない？

F：あー、なんか中学校の時、そういうなんか外国でも教えられるみたいな先生いたんですけど、すごい自分の志望校否定する人で、だからあんまり受けたくないっていうか、自分の担任にも言いました、その先生とは受けたくないって。だからあんま勉強教えてもらわんだ。

F の語りが示すように、F は、自身の体調不良により、不登校気味になっており、また、本来、F のような外国人生徒をサポートするはずであった教員とも不仲になっていることから、F の高校進学に向けた学習は決して順調とは言えない状態であった。

## 第2項 高校進学における困難に対する家庭内の取組

では、E、Fの家庭内において、2名の生徒の両親は、第1項のような日本語能力や学力の不足等の、高校進学に向けた学習における困難を克服するために、どのような取組を行っていたのか。以下は、E、Fのインタビューの中で、両親が、仕事の忙しさから、E、Fの進学に対して十分に関与してあげられなかった状況について語っている。以下は、E、Fの進学における親の関与についての語りである。

<E>

インタビュイー：Eの親ってEの進学に関して何か手助けはなかったんですかね？

E：そうですね。まあ親としては何ともできない。仕事で忙しいし、ほんとに全部自分でなんとかしなすと何もならなかったのが事実です。

インタビュイー：そうなんですね。もう自分から動かないと誰も助けてくれないみたいな。

E：そうですね。

<F>

インタビュイー：Fって受験の時、親頼らなかったの？

F：いや、親に関しては、受験を受けたいときにそういう服とか教科書とか買う時にお金用意するからって言われた。

インタビュイー：じゃあ、勉強とかに関しては基本Fに任せる感じ？

F：そんな感じやったと思う。なんか親頼っても分からないから、もう自分でやるしかないみたいな。

Eの発言より、家庭内において、Eの両親は日々の仕事の忙しさから、Eの進学に対して、十分に関与できていない状況が分かる。Eの「自分から動かないと誰も助けてくれない」という発言が示すように、Eの家庭内では、進学に対して、サポートしてくれる人物は存在しておらず、また、「全部自分でなんとかしなすと何もならなかったのが事実です。」という発言からも分かる通り、高校進学をしていく上での準備は、すべてEに放任されていた。

また、Fも同様に、進学後に必要となる金銭的な手助けに関しては、保証されていたものの、「なんか親頼っても分からないから、もう自分でやるしかないみたいな」という発言が示すように、F両親は、Fの進学に向けた学習や進路選択においては、手助けできていない状態であった。

このように、E、Fは高校進学を迎える中で、家庭内において、親からの進学へのサポートを受けられずに、自分自身で高校進学を乗り越えようとしていた。

しかし、当時、Eの家庭内において、親は、Eの学習や進路選択に対して、十分に介入

できていない現状はあるものの、親は E の学習に関しては意欲的であった。

<E>

インタビュー：E の両親って E の学習に対して手助けしてくれましたか？

E:いや、特に何もなかったんですけど、でもほぼ毎日勉強しなさいって言われてました。

E の、「特に何もなかったんですけど、でもほぼ毎日勉強しなさいって言われてました」という発言が示すように、E に対して、B の時のような直接「勉強を教える」といったサポートはされていないものの、「勉強をするように指示する」という形で、両親から、E の学習に対して、間接的にはあるが関与しようとしていることがうかがえる。このように、B と E の両親は、生徒の進学へのサポートは十分にできていないものの、生徒の学習に関しては、意識しており、何らかの形で関与しようと試みていることから、生徒の教育に対する意識は高いように思える。

E の両親が、E に、「勉強を教えるように指示する」といった形での学習の手助けを行っているのに対し、F の両親は、E の両親のような学習面での手助けはしていないものの、当時、不登校気味であった F に対して精神的なサポートを行っている。

<F>

インタビュー：学校行ってない中で、親から助けってもらったりした？

F:なんか、結構励ましてもらった。高校無理みたいな、諦めるってなった時に、その、親がもう少し頑張れみたいな、なんか頑張れ、頑張れみたいな風に励ましてもらった。

### 第3項 モデル不在の中での進路選択

前項では、E、Fの家庭内において、両親はEの学習や、進路選択において、十分な関与ができていなかったことが分かった。第5章、第4節の第2項で示したように、きょうだいを持った生徒は自身の進路選択においてきょうだいを参考にしており、きょうだいを進学におけるモデルとして捉えていた。しかし、Eの場合、Bの姉であり、Eが高校進学を迎えた当時、Eの家庭内において、自身の進路形成を手助けしてくれる存在や、進路選択のモデルとなる人物も不在であった。そのような状態は、Fに関しても同様である。そのような中で、E、Fはどのようにして進路形成を行ったのか。以下は、どのようにして進学先の高校を選んだのかについて話すEの語りである。

<E>

インタビュイー：どうしてその高校に進学したんですか？

E：その学校は、私の中学校2年、3年生に来て、定時制に行った人がいて、5、6人くらい同じような状況で日本に来て、その定時制の学校に入学できたっていうのがあったので。

インタビュイー：じゃあ、他のブラジルの方が高校に進学していたからってことですか？

E：そうですね。

Eの語りから、Eは、自身の進学先を決める上で、既にその高校へ進学をしていた日系ブラジル人生徒を参考にして、また、その進路をなぞるような形で進路選択を行っている。Eの「中学校2年、3年生に来て、その学校に行った人がいて、5、6人くらい同じような状況で日本に来て、その定時制の学校に入学できたっていうのがあったので。」という発言が示すように、E自身も、中学3年時に日本に来日し、高校進学を迎えていたことから、自分と同じような境遇であり、かつ自身の志望校へ入学することができた日系ブラジル人生徒を、自身の進路選択と重ね合わせている。E自身、先に志望校に進学した5、6人とは殆ど面識がなかったので、ただし、後で述べるように、加配教員による情報提供が大きかったと考えられる。

Eが、既に自身の志望校への進学を達成した卒業生を、進路選択の参考として捉えていたのに対して、Fは、Eとは異なり、既に進学を達成している友人からの勧めで、進学先を決めている。

<F>

インタビュイー：Fってなんでその高校に進学しようと思ったん？

F：なんか、その高校行ってる友達に、その高校どうなん？って聞いたら、なんか夜間もあるってこと聞いて、あと、私ロシア語上手じゃないんですけど、そこロシア語勉強できるって聞いて、で、そこ勉強したいみたいになった。だから、友達もいるし、行ってみ

たいなって。

インタビュー：友達が勧めてくれたの？

F：それもあるし、あと朝弱いから、夜あってちょうどいいなって思った。

Fの語りから、Fは、既に高校への進学を達成している友人からの勧めによって、自身の進路選択を決めており、既に進学を達成している生徒との面識に、Eとの違いはあるものの、そのような、進学における成功例を、自身の進路選択の参考としている点でEと共通している。

このように、これまで、インタビューを行ってきたきょうだいを持つ生徒の多くは、自身の進路選択において、きょうだいのような高校進学への経験を持つ身近な人物をモデルとしていたが、Eの場合は、そのような身近な人物ではないものの、自身と似たような経験を持っており、かつ同じ志望校への入学を目指していたような、Eと同じような境遇の日系ブラジル人生徒を自身の進路選択の参考として捉えていた。

また、Fの場合は、Eとは異なり、「友人」といった身近な人物を、自身の進路選択における参考として捉えていたが、家庭内から外れた、そのような高校進学における成功例を参考にするという点では、Eと共通していた。

#### 第4項 自分のように苦勞してほしくないという思い

前項において、親は、Eの学習に対して、関与しようとしていたが、なぜ、親は、Eに対して、そのように勉強を教えたり、勉強するようにと強いるのか。Eのインタビューから明らかになったのは、親は、生徒に対して良い仕事に就いてもらいたいという思いから、自身と同じような苦勞をしてほしくないと思っていることである。以下は、どのような思いから、親はEに対して勉強するようにと強いるのかについて話すEの語りである。

インタビューー：どうしてEの親は、Eに対して毎回勉強しなさいって言ってたんですか？

E：たぶんですけど、いい仕事をしてほしいからだと思います。よく、自分みたいな大変な仕事じゃなくて、もっと安定した仕事をしてほしいっていう感じで言われてたので。

Eの語りが示すように、Eの親は、Eに対して、自身のような不安定な仕事よりも、より安定している仕事に就いてほしいという思いで、Eの学習に対して関与しようとしている。Eの親は、出稼ぎとして日本に來日し、不安定な労働条件の下で、働いている自分のような道に進まないようにEに注意深く接していた。

このような生徒に対する自分のように苦勞してほしくないという思いは、EがBに対して、勉強を教えた際にも同様に見られた。Eの生活史でも述べたが、Eが高校進学を達成した後に、弟のBが高校進学を迎えており、その際に、EはBに対して、勉強を教えるといった学習のサポートを行っていた。Eは、そのようなBに対して、学習のサポートを行った理由について以下のように語る。

インタビューー：なぜ、Bに対して勉強を教えようと思ったんですか？

E：やっぱり、私自身が高校入るときはかなり苦勞したので、少しでも弟が氣楽になれたら良いなと思ったので。

インタビューー：やっぱり自分が苦勞したからこそ、弟さんに苦勞してほしくないって思ったんですか？

E：そうですね。

先に示した、親が自分自身と同じような不安定な仕事に就いてほしくないという思いと同様に、EもBに対して、自分と同じ苦勞をしてほしくないといったような思いで、Bに対して振舞っていた。

このように、Bの家庭内において行われていた、親、またはEによるBへの学習のサポートは、Bに対して、自分自身と同じような経験をさせないという背景の下行われており、その際は、Eも親も、Bに対して、自分と同じような苦勞を経験させないように、

接していた。

## 第5項 E、Fの学習の困難に対する教員のサポート

第3節から、Eの親は、生徒の学習に対する教育熱はあるものの、実際に家庭内において、生徒自身の進学に対して、十分な関与はしていなかった。また、学習のサポートに関しても、特にEは、Bとは異なり、両親から、「勉強を教える」といった直接的なサポートはなく、家庭内において、Eは、高校進学に向けた学習や進学を、自分自身で克服しようとしていた。

またFにおいては、そのような家庭内において、進学に向けた学習をサポートしてくれる人物が不足しているのに加えて、自分自身が、不登校気味になっており、高校進学が深刻な状態にあった。

そのような中で、Eは、自身の進学及び学習において、特に手助けになった事として、加配教員からの支援や励ましを、Fは、担任の先生によるサポートを挙げている。

<E>

インタビュー：進学や学習の際に困ったこと色々あったと思うんですけど、その際に助けになったことってありましたか？

E：そうですね、周りからの支援、励ましですかね。私は、中学校だと、国語とかは当然分からないのが当たり前で、いつも先生と別の教室に行って、日本語の勉強を一緒にしてましたね。

<F>

インタビュー：面接の練習とかがって誰かに助けてもらったりした？

F：担任の先生に手伝ってもらった。なんか私ほとんど学校行ってなくて、先生が、家来るときあったんですよ。で、その時、なんかそろそろ学校行かんとやばいよってなって、高校の話なった時、先生が面接と作文と国語と英語やらなきゃだめって言って、面接と作文は手伝うよってなったから、それから、けっこう面接の練習はしました。

インタビュー：じゃあ、受験する上で担任の先生って助かったんやね。

F：助かりました。

Eの語りから、Eは、高校進学への学習において、日常的に、加配教員を頼っており、教師に勉強を教えてもらうことによって、自らの学力または日本語能力の不足を克服しようとしていた。Eは、家庭内における学習へのサポート不足を、教員に勉強を教えてもらうことで、補っていたようである。

また、Eに対してFは、高校受験における面接と作文において、担任の先生を頼っており、また、担任の先生も、当時、不登校気味であったFを気にかけて、積極的に、Fの進学をサポートしようとしている。

## 第6項 加配教員による進学へのサポート

また、E は、相談員からは、上記のような学習へのサポートに加えて、進学においてもサポートを受けていたと語っている。以下は、E が受けていた、教員による進学へのサポートについて語る E の語りである。

<E>

インタビュー：先生から、進学にかんする支援みたいなのは受けていたんですか？

E：そうですね。私が行こうとしていた高校はもともと私の中学校からもブラジルの人が進学してて、進学先について不安になったときに、例えば、あの子も中学3年生に来て、その定時制の高校に入学できたんだから、あなたもやればできると思うよって先生からはよく言われてましたね。

インタビュー：先生からはよく励ましてもらってたんですね。

E：はい。それがあって頑張ろうと思いました。

E の語りから、E は、加配教員から、自身の志望校に関して不安になった際に励ましてもらっていたことが分かる。E の、「それがあって頑張ろうと思いました」という発言が示すように、教員からの励ましをきっかけにして、E は、高校進学への勉強に本腰を入れるようになり、結果的に、自身が志望する高校に入学することができている。こうした、家庭内での進学のサポートの不足を、学校での教員からの励ましによって補うような形は、先に示した、学習のサポートの事例と類似している。

このように、E は、家庭内において、進学や学習への十分なサポートは受けられずにいたが、他方、それらの不足を補うようにして、加配教員からの指導を受け、また時に励ましてもらうことで、教員に背中を押されながら、結果的に志望する高校に入学することができた。

## 第6章 考察

本稿では、日系ブラジル人生徒の高校進学率が日本人生徒と比べて低い状況にあることを踏まえて、6名の日系ブラジル人生徒を対象に、外国人生徒の高等学校等への進学に関して影響を与えると考えられる家庭を含めた環境の特徴について、調査を行ってきた。

以上で得られた、日系ブラジル人生徒の教育達成に関する知見は以下のようにまとめることができる。

第1に、日系ブラジル人生徒の学業不振には、親による生徒の学習への不十分な関与が影響していることである。志水・清水(2001)は、日系ブラジル人生徒の学業不振の要因として、生徒の学習への親の不十分な関与を指摘しているが、今回行った7名の生徒へのインタビューからも、いくつかの生徒は、先行研究と同様に、親は家庭内において、生徒の学習や、進路選択に十分に関与できていない状況にあることが確認できた。生徒の親は、いずれも、既に母国での就学を修了しているため、日本の学校での就学を経験していない。そのため、日本語能力に関しても、多くの親は、日本語が全くできなかつたり生徒の学習に十分に介入できるほどの日本語能力を持ち合わせていなかった。その結果、親は、生徒の学習や進路選択に十分に関与できず、結果的にそれが生徒の負担となっていた。

また、志水・清水(2001)では、日系ブラジル人生徒の学業不振の要因として、親の不十分な関与に加えて、親は、家庭内において、生徒の高校進学に向けた具体的な教育戦略を行えていないことを指摘している。本研究においても、親は、生徒の学習に対して、十分に介入できていない状況にあることが確認できた。しかし、親は、生徒の学習に対して、決して無関心というわけではなく、また、少なからず生徒の高校進学に向けた具体的な教育戦略を全く行えていないわけでもなかった。実際、Cの親は生徒に対して、「勉強を指示する」という形で、生徒に勉強するようと言い聞かせており、また、Bの親は、数学など日本語能力がさほど要求されない科目において「勉強を教える」という形で、生徒の高校進学に向けた学習に対して、積極的に関与しようとしていた。これらは、生徒の高校進学に向けた学習への具体的な教育戦略であると言える。このことから、生徒の親は、生徒の学習や進路選択に十分に関与してあげたい思いはあるものの、日本語能力の不足や日本での教育経験の欠如などによって生徒の学習に十分に関与することができずにいる。

しかし、そうした中で、親は、生徒の高校進学に向けて、「勉強を指示する」ことや、「勉強を教える」といった生徒の学習への前向きな教育的取組を行っていた。インタビューを行ってきた、生徒の親の中には、日本での滞在が、10年以上に渡る長期的な移住者であり、日本での定住志向は高い。勿論、このまま永続的に日本に滞在しているわけではないが、少なくとも、日本での滞在が生活の前提となっているのは確かである。実際、Aの親は、既に日本での定住を目的として2年前に、富山県射水市にて、住宅を購入し

ており、また、Cの親に至っては、ブラジルへの帰国を全く考えていなかった。このように、既に日本での生活が定着している中で、生徒の将来的なキャリア形成を日本で行うことは、当然のように思える。こうして、親は、生徒に対して、日本でより良いキャリア形成をするようにと強く考えるようになり、まさに将来的な問題である高校進学に対しても、より注力する傾向があるのではないかと考える。

しかし、そのような長期的な滞在を経験しているのにも関わらず、現在においても、親の将来的な移住計画と、生徒自身の将来への思いとの間に、ズレが生じている事例もあった。B、Dは、自身の将来設計に関して、日本での就職を希望していた。これは、B、Dは共に日本での高校に進学しており、既に長期的な滞在を経験しているため、先にも述べたが、自身の将来設計も日本で行おうとするのは、真つ当な判断である。しかし、B、Dの親は、将来的に、明確な時期は決まっていなかったものの、母国での帰国を考えており、親子間において、将来設計にギャップが生じていた。

このように、長期的な滞在により、将来的なキャリアを日本で調整しようとする一方で、家族間において、そのような将来計画が十分に共有されていない場合、B、Dのような、親子間において、将来設計のズレが生じ、結果的に生徒の進路設計にも支障をきたしてしまうことにつながりかねない。

第2に、日系ブラジル人生徒の学習や進路選択において、きょうだい、生徒の進学を手助けする「相談相手」として機能していることである。先行研究では、生徒の学習や進路選択など、生徒の教育達成において、「親による生徒の教育への参加」が重要視されているが、第5章分析の第3節「生徒の学習や進路選択におけるきょうだいの影響」からでも見られたように、生徒の学習や進路選択においては、親よりもむしろ「きょうだい」による影響が大きい。とりわけ、日系ブラジル人家庭においては、日本での進学を適切にガイドする者がいない。いくつかの生徒の親は、日本での教育経験がなく、高校進学に関する情報も、持ち合わせていなかった。そのため、生徒の進路選択においても十分な助言を行えず、結果的に、それが生徒の孤立を生んでいた。しかし、そうした中で、生徒は、日本での学習や高校進学の実験があり、そうした情報もある程度持ち合わせている「きょうだい」を頼ることで、高校進学を克服しようとしていた。Aは、高校進学において重要な進路先の選択を姉に手伝ってもらい、Bも、日本での学習を行っていく上で、既に日本での就学を経験し、高校も卒業している姉を頼りにすることで、日本での就学を切り抜けようとしていた。また、Cも同様に、高校進学に当たって、日本の高校に関する情報を得る際、日本での教育経験が乏しい親よりも、高校進学の実験がある姉を頼りにしており、また、当時の経験を振り返って、高校進学をする上で、姉の存在は大きかったとまで語っていた。

加えて、C、Dは、自身の進路選択において、姉をモデルとして捉え、姉が辿ってきた進路をなぞるような形で、進路選択を行っていた。先にも示したが、生徒の進路選択において、「きょうだい」の存在が生徒の進路選択において大きい。そのため、B、Dのような、生徒自身が、きょうだいと全く同じようなキャリア形成を行うことは容易に理

解できる。

このように、きょうだいの存在は、生徒の学習や進路選択に多大な影響を与え、生徒の教育達成を左右する要因となりうる。

しかし、そのようなきょうだい不在の中で、高校進学における困難を乗り越え、無事に、志望校への進学を達成している事例も見られた。

EとFは、先に示した生徒と同様に、日本語能力や、学力において、困難を抱えていた。Eは、高校進学を、来日間もなくして迎えたために、日本語能力が十分に備わっておらず、また、学習内容においても、日本とブラジルの両国間において、違いが生じていたことから、Eの高校進学は深刻な状況にあった。また、Fに関しても、自身の体調不良から、不登校気味になっており、高校進学すら諦めようとしていた状態であった。

そのような中で、E、Fの両親は、生徒に対して、自身と同じような苦勞をしてほしくないという思いから、勉強をするようにと指示したり、不登校気味になっていた中で、進学を諦めようとしていた際に、何度も励ますといった形で、E、Fの進学を手助けしていた。しかし、そのような生徒を手助けしたい思いはあるものの、結果的には、EとFの進学や学習は、生徒自身に放任されており、EとFは、自分自身で、高校進学を乗り越えようとしていた。

しかし、そのような中で、自身の進学や学習をサポートする存在として、Eは、学校の加配教員を頼り、また、Fは、担任の先生を頼ることで、高校進学を乗り越えようとしていた。実際、Eは、国語以外の科目において、加配教員の助けを借りており、また、Fにおいても、面接や作文の練習を担当の先生と頻繁に行っていた。

また、EとFの進路選択においても、Eは、これまでの、きょうだいのような身近な人物ではないものの、自身と似たような経験を持っており、かつ同じ志望校への入学を目指していたような、同じような境遇の日系ブラジル人生徒を自身の進路選択の参考として捉えており、また、Fは、既に高校への進学を達成している友人からの勧めによって、自身の進路選択を決めており、Eと比較して、既に進学を達成している生徒との面識に、違いはあるものの、そのような、進学における成功例を、自身の進路選択の参考としている点でEと共通していた。

このように、EとFは、きょうだい不在の中で、加配教員や、担任の先生といった、学校の教師を頼ることで、高校進学を乗り越え、無事に高校進学を達成している。

きょうだい不在している場合、日本での学習や進路選択を適切にガイドできる人材が、家庭内において不足していることにつながり、結果的に生徒に対し、マイナスな影響をもたらす。日系ブラジル人家族の場合、当然、そのようなきょうだいを持たない生徒も多くいることから、きょうだいの有無によって、日系ブラジル人生徒の教育達成は左右され、少なからず、きょうだいの不在が学業不振の一部分を担ってしまう恐れがある。しかし、EやFのように、日本での教育経験を持つきょうだいがいないというハンデを背負いながらも、自身が利用可能な資源を最大限に活かすことで、高校進学を達成した事例もあった。EとFは、家庭内において、自身の高校進学を直接的にサポートで

きる存在がいなかったことから、積極的に、学校の先生を頼っていた。それは、EとF自身が家庭内において、誰も頼れる人がおらず、自分自身でやるしかないという思いによって駆り立てられた行動である。

以上のように、日系ブラジル人生徒の学業不振には、親の無関心や日本とブラジルの両国間における学習内容の違いなど、多様な背景があり、それらが積み重なって結果的に、日系ブラジル人生徒は、日本人生徒と比べて高校進学が困難な状況にあった。日系ブラジル人生徒の場合、ただでさえ、日本語能力において日本人生徒と比べて言語的不利を背負っているにも関わらず、日本語能力や教育経験が不足している親の存在など、多様な困難の中で、生徒は、高校進学を迎えることになる。しかし、そうした中で、きょうだいの存在や、学校の先生といった、自分自身が置かれている状況によって、利用可能な資源を模索していき、それらを積極的に活用することで、高校進学を乗り越えていく状況が本調査で伺えた。

## 注

- (1) 出入国管理及び難民認定法（入管法）は、本邦に入国し、又は本邦から出国するすべての人の出入国の公正な管理を図るとともに、難民の認定手続を整備することを目的とした法律である。入管法には、在留資格の変更や在留期間の更新の手続（在留審査手続）、在留カードの交付の手続、法務大臣に対する住居地や氏名などの変更の届出、在留資格の取消しの手続、不法残留等の方に対する手続（退去強制手続（「在留特別許可」を含みます。)) や、不法残留等の方に関する通報に関することなどが定められている(男女共同参画局、2022)
  
- (2) 加配教員とは、都道府県ごとの教員定数に上乗せして、文部科学省によって配置される教員である。公立学校における教育定数は、義務教育標準法によって算定され、加配教員は、主に非常勤教師として、加配される。加配教員は、主に、生徒への支援を目的としており、生徒の必要に応じて、生徒への学習指導や、進路指導を行っている。

#### 【参考文献】

- ・青木由香、2013、「問題のありか」小倉利丸編者代表『富山における外国人の子どもたちの教育—子どもたちの声と支援をめぐる動き』（富山大学「東アジア『共生』学創成の学際的融合研究」報告書）、p.21
- ・岩村 ウィリアン雅浩『日本教育社会学会大会発表要旨集録』（52）：241－244
- ・志水宏吉、2001、『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる』明石書店、p 212－ p 213
- ・志水宏吉、1999、「ニューカマー家庭の教育戦略：3つのエスニック・グループの比較から」酒井朗、児島明、堀家由妃代、家上幸子、堂寺泉『日本教育社会学会大会発表要旨集録』（51）：159-164
- ・志水宏吉、2001、「出稼ぎと永住のはざまで—日系ブラジル人の教育戦略—」児島明
- ・山本晃輔、2014、「帰国した日系ブラジル人の子どもたちの進路選択—移動の物語に注目して—」、『教育社会学研究』94(0)：281－301

#### 【参考 URL】

- ・アレッセ高岡、2020、「アレッセ高岡」  
(<https://www.alDcD.orF/>2022年1月17日取得)
- ・外務省、2014、「在日ブラジル人に係る諸問題に関するシンポジウム」  
([https://www.moEa.Fo.jp/moEaj/arDa/latinamDrica/kaiFi/brazil/sympo\\_2004.html](https://www.moEa.Fo.jp/moEaj/arDa/latinamDrica/kaiFi/brazil/sympo_2004.html)2022年1月17日取得)
- ・サポナビたかおか、2012、「アレッセ高岡」  
(<https://saponavitakaoka.jp/Froup8/>2021年1月17日取得)
- ・富山日伯交流友の会、2007、「富山日伯交流友の会」  
(<http://tomonokai2009.bloF38.Ec2.com/bloF-catDFory-1.html>2021年1月17日取得)
- ・富山県、2021、「富山県内における外国人住民数(令和3(2021)年1月現在)」  
(<https://www.prDE.toyama.jp/1018/kurashi/kyousDi/kokusai/kj00011384.html>2022年1月17日取得)
- ・柳本直樹、2012、「富山県在住の外国人児童の学習支援—アレッセ高岡の取り組み—」  
([https://drivD.FooFID.com/EilD/d/18-6-\\_tPMxdZ5-8Q1V2inlqbFjC7JZVkl/viDw](https://drivD.FooFID.com/EilD/d/18-6-_tPMxdZ5-8Q1V2inlqbFjC7JZVkl/viDw)2022年1月17日取得)